書評：近藤・中溝・三浦（訳）「脳と視覚—グレゴリーの視覚心理学」

東京商船大学　下野孝一

この本はR. Gregoryの名著「Eye and Brain」の第五版の翻訳です．訳者の近藤・中溝・三浦の各氏は視覚心理学の専門家で，翻訳も数多くこなされてきた方々です．それなのに，私ごときが本書の内容や，翻訳に関して書評をするのはおこがましいとお叱りを受けそうですが，ここは一読者としての感想をもって書評としたいと思います．

個人的な事情からはじめますと，実は，「Eye and Brain」の英語版を今学期の教科書にしようと思っていました．この翻訳が出たおかげで授業の苦しみから少し救われるかもしれません．英語の嫌いなわが大学の学生さんにも朗報でしょう．まずは翻訳者の方々に感謝．

この本では，視覚に関して，生理学，眼光学から哲学，芸術まで幅広い分野にわたる議論が展開されています．その議論は，視覚研究の面白さ，奥深さ，困難さを十二分にわれわれに伝えてくれます．この本はまた，過度に専門的にならずに，図を豊富に使うなど，初学者の興味を引くように，工夫されています（アナグリフのおまけ付です）．また，心理物理学的測定法については，独立した章こそありませんが，第10章でミューラーリヤー錯視を使って簡単に説明があります．私のように数式にアレルギーのある人間にもとても読みやすい．逆にいうと，より専門的なことに興味のある人には少し物足りないかも知れません．しかし，心配はご無用．より詳しく学びたい人は巻末の文献紹介を参考にすることができます．［大きな声では言えませんが，「脳と視覚」は授業に手を抜きたい教師に最良（？）の教科書かも知れません（今回，試してみるので，この仮説の妥当性については追って紹介します）］．

この本の中で，私が特に興味深かったのは，光学，色覚などに関する歴史的な事実でした．歴史的な事実に出会うと，いずれ劣らぬ知の巨匠たちが長年に渡って解こうとした問題に末尾ながら自分も取り組もうとしていることがちょっとうれしかったりします．また，意識に関する議論にも引き込まれました．クオリアなる用語の意味もはじめて知りました（ただ，おまえが不勉強なだけだという声が聞こえてきそうですね）．

この本を読み終えての最大の驚きは，76歳（1923年生まれ）にしていまだ衰えないGregoryの知的好奇心です．ご存知のように，「Eye and Brain」の初版も平凡社から翻訳が1970年に出版されています．この数十年に視覚研究は大きく発展し，多くの知見を得ています．Gregoryは，第5版の中で最新のトピックにもきちんと触れています．ちょっと研究に疲れているあなた，「脳と視覚」を読んでGregoryのパワーに触れてみませんか．

書誌データ

近藤・中溝・三浦（訳）：「脳と視覚」—グレゴリーの視覚心理学（R. L. Gregory: Eye and Brain, 5th edition）．ブレーン出版，2001年3月10日発行．3800円．

目次

第1章　視覚を考える
第2章　光
第3章　眼
第4章　脳
第5章　明るさ知覚
第6章　運動知覚
第7章　色知覚
第8章　知覚学習
第9章　芸術のリアリティ
第10章　錯覚
第11章　最後の思索